

資料

パ　　リ
—— 誕生から現代まで ——
[XX]P.ク　ール　ティ　ヨン　　著
金　柿　宏　典*　　訳注

総裁政府と第一帝政　（3）

第一帝政（1804-1815）

パリの美化、それがナポレオンの目的だった。記念建造物がそれぞれ自分の勝利を想起させる事を彼は欲したのである。弥漫した恐怖から靈感を受け、ボナパルトは、自分に皇帝の冠を授けるよう上院に決議させた（1804.5.18.）。皇帝はかくて偶像になる。大軍事パレードの日に、彼がチュイルリ宮の中庭に姿を見せると、熱狂にまで高まった賞賛の叫びで迎えられた。しかし大軍団の行進が終り、人々が現実の貧しさに戻った時、大革命はコースをはずれて失敗した、と彼らは思ったのである。ブルジョワたちの反対、商人やサロンの反対は、潜在的敵意を保っており、この頃は可成り強くなっていたので、ナポレオンは首都をパリから他に移転すると暫く間パリ市民たちを脅迫せざるを得なくなった程である。ヨーロッパ相手の闘争は心配症の臆病な人々のみならず、人的物的両面での絶えざる消耗を不可避の結果だと考える勇敢な人々をも不安にさせたのである。統領政府時代に活発だった商業は、マリア・ルイザ¹⁾との皇帝の再婚の後で停止してしまう。1810年になると、2つの戦闘の間を除き、ナポレオンはほとんどパリに姿を見せなくなる。宮廷で

* 福岡大学人文学部名誉教授

は前ほど人々は身を飾らなくなる。レセプションも以前と同じような華やかさがなくなる。霧月 18 日以後、サロンは招待客を制限しなければならなくなった。

ナポレオンはつましい皇帝の暮しをしていた。女性に対して素っ気ない彼は女官のレミュザ夫人²⁾の敵となる。ジョゼフィーヌは統領政府の初期と同じく帝政の最初の数年間を魅了した。しかし離婚が宣言される前から既に、彼女は一人でマルメゾンに行く習慣になり、晩年の 4 年間でその邸で過す事になる。

オルレアン公との身分違いの結婚で相続権のない末亡人となったモンテソン夫人邸で、レカミエ夫人はその優雅さと美しい才智を見せていた。彼女の夫の銀行家は 1806 年に破産する。(ナポレオンはおそらく自分の敵であるスタール夫人に対するジュリエットの友情を妬んで、フランス銀行による援助の融資を拒否したのである。) 詩人や学者や芸術家たちはジェラル男爵³⁾邸に参集したが、そこで人々は、ナポレオンの妹ポーリーヌ・ド・ボルゲーゼ⁴⁾の肉体に狂おしきまでにとりつかれたカノヴァ⁵⁾を見かける事になる。

それは帝国の貴族たちの時代であり、ヤコブの家具類や財政的破綻の時代でもあった。贅沢への野心と熱望はすべての人々を揺り動かし、誰もが美々しい行列で通り過ぎる社交界の人たちの生活に僅かでも参加したいと欲していたのである。

89 年の大革命の痕跡はもはや何処にもない！「社会契約、ブルータス、人権」と建物に記されている未だに判読し得る古びた銘文を除いては。大革命の名残りに代り、軍人と剣が人間と本にとって代る。しかしながら、龍騎兵少尉のアンリ・ベール⁶⁾は、イタリアで新しい文体の小説を構想していた。ロマン主義的心情の吐露へ向う前に、人々は簡潔な手法で文章を書いていたのだ！ ナポレオン自身でさえ布告を要約しなければならなかった。しかしシャトブリアンは容疑者である。スタール夫人とジョゼフ・ド・メストル⁷⁾は被追放者だった。『論争』紙 *Journal des Débats*⁸⁾ は『帝国』紙 *Journal de l'Empire* になった。印刷の自由が制限される。数紙が、1812 年に廃刊に追い込まれる。コルネイユの劇は台詞の一部をカットされて上演される仕末だった。

不平不満が皇帝の警察の独裁に対して湧き上る。フーシェと彼の配下の巡査は到る所にいた。彼らは演劇、文学、著作権などあらゆるものに監視の目を向けていた。ナポレオンは、教会と同じく自分の権力に服従させたかった大学のトップに「総長」*grand maître* を据える。大陸封鎖令⁹⁾により、彼はイギリスとの通商に対して大陸のすべての門戸を閉じた。陰謀はマレ将軍¹⁰⁾の陰謀のような新手が出現する。彼は独裁者がロシア遠征中に、バリの支配権を奪取しようとして失敗する。ローマ王¹¹⁾の誕生は社会各層を統合し、彼

らに一時的だが偶像ナポレオンを賛美する新しい理由を与えた。しかし、それは間もなく、ロシア遠征が惹起した不安と物価騰貴と食糧不足にかわる。

県知事はマレ事件に連座したフロジョ¹²⁾に代り、シャブロール・ド・ヴォルヴィク¹³⁾が任命される。パリは活気を失い陰気になる。公式報告書が軍の最初の敗戦を告げ始める。商業の危機が深刻化する。外人の訪問者たちがパリを去る。1813年6月、ヴィトリアアのジュールダン¹⁴⁾の敗北を、8月にはグロス・ベーレンでのウディノー¹⁵⁾の苦戦を、さらに他にも続出した敗戦を人々は知る事になる。9月に、ネー¹⁶⁾がデネヴィッツで敗退する。10月はライプツィヒの会戦である¹⁷⁾。株式取引所では、国債が値下りする。パン、肉、香辛料などなんとしても必要な食糧品しか人々は購入しなくなる。ナポレオンはもはや「郊外の下層民」しか支持者を持っていなかったが、彼自身この事をブリエンヌ¹⁸⁾と語っていなかっただろうか？ 6万人の労働者のうち、半数以上が失業していた。しかしながら彼らは、16歳で志願兵となった子供たちをラーン¹⁹⁾の丘陵地帯で戦死するために送り出していた。一時的だがそこで得た勝利がパリに再び勇気を与えた。人々は、プロシヤ兵、オーストリー兵、ロシア兵が粉碎されるのを期待した。1814年には楽しいカーニヴァルが開催される。2月27日、マリア・ルイザは玉座の間で敵軍から捕獲した軍旗を受け取るのである。

しかし希望ははやくも捨てなければならなかった。連合軍はパリに進撃してくる。3月29日、皇后は我が子ローマ王と共にプロワに避難する。30日、モンセー²⁰⁾がクリシーのバリケード²¹⁾で烈しく抵抗する。しかし、その翌日、マルモン²²⁾が降伏する。4月1日、元老院はナポレオンの廃位を宣言する。同日、オーストリー軍将軍シュワルツェンベルク親王²³⁾が、パリの城壁に次のような布告を掲示させた。「20年来、ヨーロッパは血と涙に溢れていた。かくも多くの不幸に終止符を打つべく取られた試みが無駄になっていたのは、諸君たちを抑圧していた政府の権力の内部に平和に至る乗り越える事が不可能な障害が存在していたからである。」

かくて征服者の連合軍の首都入城になるのだが、家々は窓を閉め、人々ははしかめ面をしていたのは、外国人を前にした屈辱感からである。しかし昔日の王政に忠誠のままでいた女性たちは、コサク騎兵の到着したシャン・ゼリゼで白いハンカチを振ったのである。パノラマ・アーケード街²⁴⁾から行けるガン大通り²⁵⁾で人々は白いリボンの花結びの徽章を掲げた。人々は皇帝の像を破壊し始める。タレイランは勝利した四大強国とパリでの条約交渉に備えた。

プロレタリアは目をこすった。彼らにとりナポレオンは大革命の息子であり続けたからである。ボナパルトの軍事力の中に、労働者たちは、反動勢力への闘争の継続を見ていた（皇帝がフォンテーヌブローの別荘²⁶⁾の後で避難して行くエルバ島²⁷⁾からの帰還を、彼らは期待していたのである）。しかし、他方、フォーブール・サン・ジェルマンではブルボン王家への熱烈な歓迎を示し、愛国的な貴族階級は王家の復讐を期待した。

ナポレオン帝国の14年間は、科学と芸術の分野において確かな繁栄を伴った。それはモンジュ²⁸⁾と図形幾何学、ラプラス²⁹⁾と宇宙発生論、ラセペード³⁰⁾の博物史、比較解剖学と古生物学におけるキューヴィエ³¹⁾の巨大な創造などなどである。化学者シャプタル³²⁾、物理学者ゲー・リュサック³³⁾、ナポレオンの侍医となったコルヴィザール³⁴⁾、組織研究のブルセ³⁵⁾、聴診を実用化したラエネク³⁶⁾などの名医がいる。外科医はデジュネット³⁷⁾やラレー³⁸⁾がいるが、後者は大軍団の軍医として従軍している。

芸術においては、第一人者は常にダヴィッドであり、『戴冠式』*le Sacre*の画面で、女性たちに、物腰とスタイル、バラ色と白色を与えている。彼女たちは胴着を短くし、スカートを締めつけローブ・タブリエを着ていた。ジュリコー³⁹⁾の先輩グロ男爵は『ヤッフアのベスト患者』*les Pestiférés de Jaffa*⁴⁰⁾により、荒々しいタッチの新流派の基礎を作っている。自分を描いてもらいたい優雅な美女は、ジロデが自分のためにオシアン風のポーズをみつけてくれる事を望み、ジュラルが自分の顔を描いてくれ、ボワリ⁴¹⁾が衣裳係になり、カルル・ヴェルネが道具方の親方になってくれる事を祈ったのである。彫刻家には、パリ生れのバジュ⁴²⁾、ウードン⁴³⁾と震えるような感受性の胸像、それにリュード⁴⁴⁾。音楽はメユル⁴⁵⁾、ケルビーニ⁴⁶⁾、ボワエルディユ⁴⁷⁾、ゴセック⁴⁸⁾、エロール⁴⁹⁾、オーベール⁵⁰⁾などがいたが睡眠状態にあったといえる。

総裁政府時代には厳格に過ぎた家具類は彫刻を施した金色のブロンズで装飾過剰になる。それは大理石の円柱やセーヴル焼き⁵¹⁾の壺、ハーブや楽譜鞆を備えたサロンにもみられた。大革命時代、フォンテーヌ⁵²⁾と協力したペルシエ⁵³⁾が、ヤコブ⁵⁴⁾のために長椅子や小型の円卓ゲリドンやすっきりして簡素な衣裳箆等でデザインした時間はもはや無かったのである。

帝政時代の建築家たちは同じペルシエ・フォンターヌ組が、フランス陸軍の榮譽のためにカルーゼルの凱旋門を建立したが、(この記念建造物はローマのセプティミウス・セヴェルス⁵⁵⁾の凱旋門の模倣である)。彼らはルーヴル宮を増設し、リヴォリ街に面したチュイリ宮と連結する。ルーヴル宮についてはさらにこの二人の協力者は、クール・カレとカ

ルーゼル広場の間に、内庭の正面玄関が2つある一連のパヴィリオンを建設した。ヴァンドーム広場の円柱を建立した建築家を除けば、他の建築家たちは明らかに劣っている。ブロンニャール⁵⁶⁾は株式取引所を建築し、ポワエ⁵⁷⁾はブルボン宮（国会議事堂）の正面玄関を手掛けた。最期にシャルグラン⁵⁸⁾の計画により、エトワール広場の凱旋門の建設が開始される。礎石は1806年8月15日に据えられる。マリア・ルイザはパリ入城の日ようやく出来かけたこの門をくぐった。

(続く)

パ リ

—— 誕生から現代まで ——

(訳 注 XX)

1) Maria Luisa, フランス語読み Marie Louise (1791-1847) : フランス皇帝妃。オーストリー皇帝フランツ 1 世の娘でナポレオンと 1810 年 4 月 1 日に結婚した。ワグラムの勝利でオーストリーと和平条約を締結する時の条件の一つで、後継者が欲しいナポレオンがそれにふさわしい家系から妻を求めたかったからである。純然たる政略結婚であったから、彼女がナポレオンに真の愛情を抱かなかったとしても当然かもしれない。彼女はパリ市民により熱狂的に歓迎された。翌年彼女は皇帝待望の後継ぎを産む (1811.3.20.)。ローマ王の称号を受けてナポレオン 2 世となるフランソワ・シャルル・ジョゼフ・ナポレオン・ボナパルト (1811.3.20.-1832.7.22.) はその後宿命の波に揉まれ僅か 22 歳でウィーンで歿する。1813 年ロシア遠征に出発したナポレオンは、彼女を攝政に任じたが、権力はほとんど無かった。ナポレオンの失脚後、彼女は実家のウィーンの宮廷に帰り (1814.4.)、百日天下の間もシェーンブルン宮殿に滞在し続けた。この間にアダム・アダルベルト・フォン・ナイベルク伯爵 (1775-1829) と結ばれ 2 児を儲けるが、ナポレオンの死後 4 か月目に正式に結婚した (1821.9.)。フォンテーヌブロー条約 (1814) により、彼女にパルマ、ピアツェンツァ、グアスタラ各公領が贈与された (1816.4.)。この公領の人たちは彼女のお蔭で他のイタリアの地の人々よりも多くの自由を享受した。ナポレオン法典の大部分が此处では活用されている。夫の死 (1829) 後、彼女はシャルル・ルネ・ド・ボンベル伯爵と再婚 (1834) した。彼はウィーン宮廷の侍従であった。

2) Claire Elizabeth Jeanne Gravier Vergennes, comtesse de Rémusat (1780-1821) : フランスの女流作家。大伯父にルイ 16 世の外務大臣を務めたヴェルジャンヌ伯爵 (1719-1787) がいる。1796 年にオーギュスト・ローラン・ド・レミュザ伯爵 (1762-1823) と結婚した。夫は帝政時代の宮廷長官でナポレオンの侍従を務め劇場監督長官も兼務していた。彼女は女官となりジョゼフィーヌ皇后に信任され親友となった。エスプリに富んだ才女で小説も書いているが、『回想録』*Mémoires* 3 巻 (1879-80) と『書簡集』*Lettres* 2 巻 (1881) を残している。これらは統領政府時代や帝政時代の宮邸生活や歴史を知る上で貴重な文献になっている。

3) François Pascal, baron Gérard (1770-1837) : フランスの画家でローマに生れた。

ダヴィッドの最良の弟子の一人で、師の古典派の技巧を受け継ぎ、歴史的題材の大作を残した。また優れた肖像画家としてナポレオン、ルイ 18 世、アレクサンドル 1 世、ウエリントン侯爵、タレイラン、レカミエ夫人らの肖像画を創作している。『アウステルリッツの戦闘』*La Bataille d'Austerlitz* (1810)、『アンリ 4 世のバリ入城』*L'Entrée d'Henri IV à Paris* (1817)、『シャルル 10 世の戴冠式』*Le Sacre de Charles X* (1829) などが歴史画の代表作である。

4) Marie Paulette, dite Pauline de Borghese (1780-1825) : ナポレオンの 3 人いる妹の 2 番目の妹で、美人の誉高く、ナポレオンに真の愛情を抱き、エルバ島にも同行したし、セント・ヘレナ島へも行こうとして止められている。ナポレオンも彼女を愛し、グアスタラ公爵の称号を贈与している。1797 年に兄の親友であったルクレク將軍 (1772-1802) と結婚するが、夫がサント・ドミンゴ島遠征中に黄熱病で死去したため、同行していた彼女は帰国した。1803 年にイタリアの名門貴族ボルゲーゼ家のカミーユ・ボルゲーゼ (1775-1832) と再婚するが間もなく別居し、ヌイイの邸に住んで気儘で自由な社交生活を楽しんだ。皇后ジョゼフィーヌと不仲のため宮廷には近づかなかった。彼女は軍資金の一助にと自分の宝石類を兄に提供したが、それらの宝石類はワテルロー敗戦の時、ナポレオンの馬車の中から押収されている。晩年になり別れた夫ボルゲーゼ親王との縊りが戻りフィレンツェで同居している。彫刻家のカノヴァは彼女をモデルに見事なヴィーナス像を創作した。

5) Antonio Canova (1757-1822) : イタリアの彫刻家。父は石工だった。最初ヴェネチアで学び、1781 年からローマに住んだ。ヴィンケルマンの新古典主義理論に感化され、古代ギリシャ・ローマの作品から学んで、絵画のダヴィッドとならんで彫刻における新古典派の巨匠になった。「理想の美」を追究した彼はナポレオンに愛され 3 度来仏し (1802, 05, 10)、ナポレオンの胸像 (1803) と巨大な立像「勝利を掲げるナポレオン」*Napoléon tenant la Victoire* (1811) を製作している。優美で感性的な雰囲気は漂わずポーリーヌ像 (ボルゲーゼ別荘) や「愛とプシケ」*Amour et Psyché* (ルーヴル美術館) などがある。フランス軍によって破壊された教会の作品を修復した功績によりローマ教会から侯爵位を贈与されている。彼はポーリーヌの愛人とも噂された。

6) Marie Henri Beyle, 筆名 Stendhal (1783-1842) : グルノーブルの裕福なブルジョワの家庭に生れ、父はドーフィネ高等法院所属の弁護士である。7 歳の時に優しく賢い母を失い、厳格で陰気な家庭に残された少年は父と家庭教師レラーヌ神父に一任された。

しかし彼はこの二人と対立し、生涯にわたりジャコバン派的無神論者になった。大革命は父を絶望させたが、息子を歓喜させたのである。グルノーブルのエコル・サントラルに学び優秀な成績を残す。エコル・ノルマルの入試を直前で断念したのは、この時すでに大詩人になる事を夢想していたからである。陸軍省の高官であった従兄ピエール・ダリュの紹介で採用されてイタリア遠征軍に参加、ミラノに到着して龍騎兵第6連隊の少尉に任命された(1800.7.)。イタリア滞在は彼にとり人生の最大の経験となる。1799年末から1801年末までは、彼の生涯における最も幸福な時期である。音楽を聴き、女性を賛美し、アンジェラへの甘美な初恋を体験するからである。このイタリア滞在は、後年外交官となってトリエステついでヴィタ・ヴェッキアの駐在生活と二重鏡のように、彼の作品を写し出している。

7) Joseph Marie, comte de Maistre (1754-1821) : フランスの政治家、哲学者、文学者。サヴォワの高級司法官の家に生れ、チュランのイエズス会経営の学校で学び、父と同じく裁判官になった(1774)。ヴォルテールを愛読し、18世紀の合理主義に共鳴したが、フランス大革命により深刻な影響を受け、これまでの考え方を一変する。フランス軍のサヴォワ進入(1792)によりスイスのローザンヌに亡命、その地でサルディニア国王シャルル・エマニュエル4世の知遇を得て外務省に入り、駐ロシア大使としてペテルスブルグに赴任、ロシア皇帝アレキサンドル1世を知り(1802-16)、ヨーロッパ情勢に対する見識と哲学及び神学の該博な知識で皇帝をはじめ社交界人士を魅了した。1817年に帰国し首相に就任し、大法官を兼務した。彼は一貫して18世紀の啓蒙思想と大革命に反対、絶対君主制と教皇の絶対権力を支持し、民主主義、自由主義を否定した。彼の歴史観はボシュエに近く、理性に対して信仰を対峙させた。主著『フランス論』*Considération sur la France* (1796)、『教皇論』*Du Pape* (1819, 2巻)、『サン・ペテルスブルグ夜話』*Les Soirées de St. Pétersbourg* (1821, 2巻)では、独特の迫力ある名文で雄弁を情熱的に開陳し、国家主義哲学の第一人者としての評価を得ている。

8) *Journal des Debats* : 1789年、立憲議会の論戦を報道するため創刊された日刊紙。初代編集長はフランソワ・ジャン・ボードワン。1799年にベルタン兄弟が買収、ジョフロワ、シャトブリアン、ノディエ等が寄稿した。王党派の色彩をナポレオンから嫌悪され、兄ベルタンがエルバ島へ1801年追放され、紙名も『帝国新聞』*Journal de l'Empire*と改称された。帝政崩壊後、ベルタンが復帰した1814年に旧名に復した。7月王政を熱烈に支持したが、第2帝政時代は自由主義的野党の機関紙の観を呈した。ジョフロワの執

筆した文芸欄の特に劇評が好評で、彼の死後はシャトーブリアンが担当した。第3共和政時代は保守的共和主義の立場を取ったが、1861年に復活した『ル・タン』紙 *Le Temps* に徐々に読者を奪われ、1944年8月に廃刊した。

9) Le Blocus continental : ナポレオンのイギリスに対する経済封鎖作戦。イギリス海軍による海上封鎖作戦に対抗したもの。1806年11月21日のベルリン勅令で、ナポレオンはイギリスとの通商、通信を禁じ、イギリス人は発見次第捕虜としその財産を没収し、またイギリス本国及びその植民地の商品も没収する旨、宣言した。これに対してイギリスは、1807年1月7日に「自由拿捕令」を発令し、イギリス船の入港を禁止した港を封鎖し、その港に出入した船は中立国の船といえども利敵行為の故をもって拿捕した。これに対抗してナポレオンはミラノ勅令(1807.11.23.,12.17.)で封鎖を強化し、イギリスに寄港した船はすべてイギリス船とみなし、すべてを没収すると宣言した。この封鎖令はナポレオンの軍事力が最強の時はある程度効果があった。しかしヨーロッパ諸国、特にロシアには経済的打撃が大きく、それに伴って密貿易も横行、各国の不満のため、ナポレオンも統制を緩めざるを得なかった。この封鎖令は商業貿易には大損失だったが、それまでイギリス製品に頼ってきた大陸の各国で、それを補充するための工業の開発が生じたというプラス面もあった。

10) Claude François de Malet (1754-1812) : フランス東部スイスと国境を接するジュラ県ドールの貴族階級の出身。国王銃士隊員(1771-75)、大革命勃発と共にドール国民衛兵部隊司令官、次にライン軍に入隊(1792)、1799年に少将に昇進した。熱烈な共和主義とナポレオンへの反感のため逮捕されたが(1808)、精神病院での拘禁生活を許される。1812年10月22日深夜、看守の目をくぐって脱走し、皇帝死亡の報告と偽の命令書を巧妙に利用し、パリ地区の数部隊を掌握、サヴァリ警視総監により逮捕されていた同志の將軍ギダルとラオリを釈放させ、モロー將軍、カルノー、オーギュローなどを閣僚とする臨時政府を樹立しようとした。しかしながらパリ地区司令官ユラン將軍はマレの陰謀を看破し服従しなかったため、このクー・デタは失敗した。軍事法廷は彼らに死刑の判決を下し、マレ、ギダル、ラオリ他11名の士官が、当時は郊外だったグルネルの野原で銃殺された。マレの陰謀がナポレオンのロシアからの帰還をはやめたという。蛇足ながらラオリ將軍はヴィクトール・ユゴーの名付親で、ユゴーの母の恋人であった。幼いユゴーは母に連れられこの処刑を見物し、反ナポレオン感情を吹き込まれたという。

11) François Charles Joseph Napoléon Bonaparte, roi de Rome (1811-1832) : ナ

ボレオンとマリア・ルイザの子、1811年3月20日、チュイルリ宮で誕生。同時にローマ王の称号をもらう。1814年4月4日、ナポレオンは彼に譲位しようとしたが失敗、母はこの子を実家のウィーンの宮廷に連れ帰った。彼はその後フランツと呼ばれる。1815年6月22日、ナポレオンは彼に譲位し、彼はナポレオン2世となるが、これも百日天下の間だけだった。連合国は当然ながら彼を認めなかった。その後ウィーンの宮廷で祖父のオーストリー皇帝フランツ2世の膝下で生活し、ライヒシュタット公爵に叙せられた。母マリア・ルイザは彼に余り愛情を示さなかったが、皇帝はこの孫を大いに愛した。軍事教育を受け歩兵大佐に任官した彼は、ナポレオン支持者から帝政復活の希望の星だったが、結核のため僅か22歳でシェンブルン宮殿で歿した。1832年7月22日の事である。彼の遺骨は1940年ヒトラーによりフランスに返還され、アンヴァリッドに父と並んで葬られた。

12) Nicolas Thérèse Benoit, comte Frochot (1761-1828) : 公証人, 商事事件の調停判事, 参事院議員, 次いで初代のセヌヌ県知事にナポレオンにより任命された。問題山積のバリ市の行政機構を改革し, 刑務所内のサービス, 孤児院の設立, 入市税徴収のための柵の建設などを実現し, 大いに実績をあげようとした矢先に, マレ将軍のクー・デタ未遂事件が勃発したのである。皇帝死亡の偽報道に彼は呆然自失してなす所を知らなかった。死亡が嘘である事が判明した時, フロッシュは日頃の努力にもかかわらず, クー・デタを未然に感知できなかった責任を問われ, ナポレオンにより知事を解任され, 議員の職も年金も失ってしまい, 貧窮に苦しまなくてはならなくなった。エルバ島から帰還したナポレオンは, かつての自分の処分が過酷だった事を反省し, 彼をブッシュ・デュ・ローヌ県知事に任命した。しかしこの県は王党派の勢力が強く, モンペリエで彼は狙撃され危く暗殺される所だった。幸い弾丸はそれで彼の帽子に命中しただけだった。王政復古になり, 彼は再び解任された。その後コート・ドール県のエチュフに隠退し晴耕雨読の生活を送り, 彼の霊柩車は愛していた牛四頭に曳かれた荷車であったという。

13) Gilbert Joseph Gaspard, comte de Chabrol de Volvic (1773-1843) : ナポレオンのエジプト遠征に参加し学術調査に協力する。イタリアのモンテノッテ県知事に任命され (1806), コルニッシン街道を整備した。1812年本国に召喚されセヌヌ県知事に任じられた。多くの候補者の中から彼が選ばれたのを見て内務大臣がその若さを危ぶんだ時, ナポレオンはアレコレリヴォリの戦闘の時の自分をもっと若かったと答え, シャブロールの才腕を信頼している事を示したのである。39歳だったシャブロールは皇帝の信頼に答え, パリを大帝国の首都にふさわしい見事な都市に再生した。パリ市民に非常に愛されたため,

ルイ 18 世もシャブロールを県知事に再任せざるを得なかった。「シャブロールはパリ市と結婚しているのだから、私としては離婚はさせられんよ」と国王は言ったという。

14) Jean Baptiste, comte Jourdan (1762-1833) : 16 歳でアメリカ独立戦争に参加, 1791 年に志願兵部隊指揮官になった。デュムーリエの麾下でベルギー各地の戦場で武功をたて, 1793 年に将軍になった。北部軍司令官としてカルノーと協力, ワッチニーの戦い (1793.10.16.) でオーストリー軍を破った。しかし冬期作戦を拒否して公安委員会の命令に服従しなかったため解職された。1794 年 3 月に復職しモーゼル軍ついでサンブル・エ・ムーズ軍を指揮し, フルーリュの会戦 (1794. 6. 26.) に勝利, ベルギーをフランスのため確保した。しかしその後は 1795 年, 96 年と敗れ, オッシュに交替させられた。1797 年に五百人会議議員となり, 98 年 7 月に徴兵令法案を可決させた。誠実な共和派であった彼は, ナポレオンの霧月 18 日のクー・デタに反対したため立法院から除名された。しかしやがてナポレオンは彼を元老院議員に任じチェザルピナ共和国に派遣した。ナポリやピエモンテ総督の後, スペイン国王になったジョゼフ・ボナバルト付きとなりスペインに赴くが, 反撃を開始したスペイン・ゲリラとイギリス軍のウェリントン将軍により, スペイン北西部バスク地方のヴィットリアの会戦 (1813.6.21.) で決定的な敗北を喫し, フランスはスペインから撤退しなければならなくなった。これはナポレオン大軍団の最初の大敗北で, 帝国崩壊の序曲となった。ジュールダン, 1814 年のナポレオン廃位に賛成し, ブルボン王家と結んで, 伯爵 (1816), フランス貴族 (1819) と栄進した。ネー将軍の軍事裁判の裁判長を命じられた。アンヴァリッド総裁として生涯を終えた。

15) Nicolas Charles Oudinot, duc de Reggio (1767-1847) : ビール醸造業者の息子。17 歳 (1784) で志願兵となり, 1791 年にはムーズ志願兵部隊の中佐に進級, 武勲を重ねて, 1799 年に師団長に昇進した。マッセナ (1758-1817) の参謀長としてジェノヴァ攻撃 (1800) を指揮, アウステルリックの戦い (1807.2.16.) の勝利に貢献したが重傷を負った。フリートラントの戦い (1807.6.13.), ワグラムの戦い (1809.7.5. -6.) でも勝利に寄与し, 元帥に任ぜられ, レggio公爵に叙せられた。その後ロシア遠征に参加するがグロス・レーベンでベルナドット (後のスエーデン国王カルル 14 世, 1763-1844) に破られる (1813)。フランスの国内の戦闘でもナポレオンを守って勇戦するが, 皇帝の退位後はブルボン王家に仕え, フランス貴族となりメッツ総督に任ぜられた。1823 年スペイン遠征軍を指揮, アンヴァリッド総裁になった (1842)。

16) Michel Ney, due de l'Elchingen, prince de la Moskova (1796-1815) : 樽屋の息

子。13歳の時に公証人役場の書記になったが、軍人を志して志願（1788）、その後は輝かしい武功をたて、マンハイム占領後に少将に進級した。1799年3月28日、500名の部下と共にこの都市を奇襲占領した成果である。常に兵士と寝食を共にし精力と勇気で彼らの賞賛を得、「勇士のなかの勇士」と呼ばれた。モロー将軍の下でホーヘンリンデンの勝利（1800.12.3.）の後、ナポレオンからスイスに大使として派遣され、協力関係を取り付けた。1804年5月に元帥に昇進、エルヒンゲンの戦い（1805.10.14.）で勝利し、チロルを占領した。この武功によりナポレオンは彼をエルヒンゲン公爵に叙した。その後、彼はナポレオンの主要な戦闘に参加、イエナ（1806.10.4.）、アイラウ（1807.2.8.）、フリードランド（1807.6.13.）と連戦した。ナポレオンは彼をスペインに派遣（1808-11）、彼は各地でスペイン・ゲリラを掃討、ひとまず反仏叛乱を鎮圧した。第3軍団司令官としてロシア遠征に参加、ポロディノの会戦（1812.9.5.-7.）の勝利に貢献、モスクワ退却に際しては中央軍を指揮、殿軍として本隊の撤退作戦を援護、ベレジナ川渡河を成功させた。この武功により、彼はモスクワ親王の称号を受けた。その後もライプツィヒ会戦などドイツ国内での戦いに続いてフランス防衛戦に活躍するが、皇帝の頹勢の挽回し難い事を見抜き、また兵士たちに厭戦気分が弥漫している事を知り、他の将軍と共にナポレオンに強く退位を勧告した。王政復古になり、ルイ18世からフランス貴族に任じられる。ナポレオンのエルバ島脱出の時、討伐隊長を命じられ、「鉄の檻」に入れて連行してくると国王に豪語した。しかしナポレオンに再会するや旧来の戦友愛が復活、そのままナポレオンと行を共にし、ワテルローで敗北する（1815.6.18.）。戦犯として追及されオーリヤック近傍で潜伏中に逮捕され、軍法会議での裁判を拒否、元老院で、友人たちの弁護にもかかわらず、死刑の判決を下され、その翌朝（1815.12.7.）、パリ天文台近くの一角、カフェ・レストランのクローズリ・デ・リラの前の所で銃殺刑に処された。現在は、サーベルをふりかぶっているネー元帥像が記念碑として立っている。作者は当時の名彫刻家のリュードである。

17) ライプツィヒの戦い：「諸国民戦争」Völkerschlachtとも呼ばれる。ロシア遠征に敗退したナポレオンを見て、これぞ復讐の好機とばかり、休戦していたオーストリー、プロシヤ、スエーデン、ライン連邦諸国が連合してナポレオンに宣戦、ロシア軍に協力し、撤退中のフランス軍に攻撃をかけた。独立への民族意識が高揚し、占領軍を追放し国家の独立を確立しようという戦いだっただ。フランス軍は18万に対し、ロシア、オーストリー、プロシヤを主軸とする連合軍は30万で、兵力不足が敗北の最大原因であった。しかも一部同盟軍がフランス軍を裏切るという不幸も生じ、この会戦でナポレオンは敗北、ライン

河の線まで退却、ベルギー、オランダからも撤退し、フランスは昔のフランスに逆戻りをしたのである。この会戦の戦死者はフランス側 78,000、連合軍側 51,000 といわれるが、また一説では 60,000 対 55,000 ともいわれている。いずれにしろ 10 万人以上の大殺戮があった事は事実である。戦闘は 1813 年 10 月 16 日から 19 日の間であった。

18) Louis Antoine Fauvelet de Bourrienne (1769-1834) : ブリエンヌ幼年学校時代 (1785) からのナポレオンの親友で、イタリアとエジプト遠征に参加した。1797 年から彼の個人秘書となったが、1802 年に解任され、ハンブルグ駐在公使となった (1804-13)。王政復古になり、ルイ 18 世からバリ警視総監 (1814)、ついで国務相になる (1815)。百日天下の時は国王と行を共にした。1815 年から 21 年まで議員を務めたが、反動派の一人だった。7 月革命で地位も財産も失って、精神病院で死亡した。『回想録』*Mémoires* (1829-1831) の中で、彼はナポレオンに対し可成り不公平な扱いをしている。

19) Laon : 北フランスの県でベルギーに接する国境のエヌ県の県庁所在地。アルデンヌ森林地帯の丘陵に続く丘の上にある。16 世紀に建設された要塞があり、1814 年に連合軍に降伏、奪回を計ったフランス軍の猛攻に対し、ブリュッハー将軍 (1742-1819) が死守して激戦となる。

20) Bon Adrien Jeannot de Moncey, duc de Conegliano (1754-1842) : ブザンソン高等法院の弁護士の息子。軍人を志した法学の勉強を止め 15 歳で入隊する。スペイン遠征に参加 (1793-94)、カンタブリ獵騎兵隊を率いてピレネー山地で活躍し、ヴィラノヴァの戦い (1795) に勝利し、スペインに和平を懇願させた。1801 年に憲兵総監として、第一統領に対する王党派の陰謀を阻止、その功で元帥に任ぜられた (1805)。1808 年にコンジェリアノ公爵に叙せられた。再びスペインに赴き、サラゴサ占領を果す (1809)。1814 年国民衛兵軍総参謀長としてクリシーのバリケードで連合軍の猛攻に対し英雄的な防衛を果たした。ブルボン王家に仕え憲兵総監の職にとどまるが、ネー將軍裁判長就任を拒否、解職されてハム要塞監獄に収容されている。後に許され、1823 年に再びスペイン遠征に参加した。ルイ・フィリップは彼をアンヴァリッド総裁に任命、彼は総裁としてナポレオンの遺灰の帰還行事を取りしきった (1840)。

21) la barrière de Clichy : パチニョル大通り、クリシー大通り、アベニュー・クリシー、クリシー街の 4 つの通りが交叉する十字路にあるクリシー広場が昔のクリシー城柵の跡地である。barrière は入市税徴集のため徴税請負人たちがパリ市に商品を密輸入されないように、市の周囲に建設した柵である。この柵の入口の両側に税金徴集の税務署を建造し

ていた。クリシー城柵は城門と同様に市民の出入口になっていたのである。1814年3月28日、附近の農民たちが家畜を連れクリシー城柵の市内に大挙して避難し夜営を始めた。彼らは進軍してくるコサック騎兵の迫害を恐れていたのである。29日から30日の夜にかけ、モンセー将軍は加勢のため参加したエコル・ポリテクニクの学生や国民衛兵と共に、並木を伐採し荷馬車などを利用しバリケードを造成、更に塹壕を掘って入口の防備を固めた。このバリケードを挟んでモンセー軍と伯爵ランジュロン将軍指揮のコサック騎兵隊との激戦が展開された。モンセー指揮の混成軍は寡勢にもかかわらず勇敢に戦ったが、マルモン元帥（1774-1852）がジョゼフ・ボナパルトの許可をとり、絶望的抵抗を中止させるため、ロシア皇帝アレクサンドル1世と停戦条約を結び降伏した事を知らされ、モンセーたちは戦闘を中止したのである。この停戦から3週間後の4月21日、ルイ18世の先駆けとしてベリー公がクリシー城柵を通過してパリに入城する。現在クリシー広場に立つモンセー将軍の記念像はドゥブルマルの作品で、1869年に設立された。

22) Auguste Louis Frédéric Viesse de Marmont, duc de Raguse (1774-1852) : 小貴族の出身で父は士官だった。1793年中佐に進級、トゥーロン攻撃の時にナポレオンを知り、副官としてイタリア、エジプト遠征に従軍、1798年7月21日のピラミッドの戦いで武功をたてた。霧月18日のクー・デタではナポレオンを支持、マレンゴの戦い（1800.6.14.）でも勝利に貢献したが、1804年の元帥候補に入らず、このためナポレオンを怨むようになる。対オーストリー戦争の時、ウルム市を降伏させ、司令官マック将軍以下オーストリー軍兵2万名を捕虜にする武勲をあげ（1805.10.20.）、ダルマチア総督（1805-09）、ついでイタリア総督となった（1809-10）。この間に念願の元帥となり（1809）、前年にはRagus公爵に叙せられている。マセナに代りポルトガル遠征軍司令官となりイギリス軍を撃破するが、サラマンカ近くでウエリントンに破れ重傷を負った。回復してすぐにドイツ戦役に参加、ライプツヒヒの戦いで奮戦し、連合軍の進撃を阻止した。バリ防衛に当たったが、絶望的な抗戦に無益な流血を避けるため、ジョゼフ・ボナパルトの了承を得て、ロシア皇帝アレクサンドル1世と休戦協定を結びパリを開城し、連合軍はパリに入城する（1814.3.31.）。1814年4月3日、ナポレオンが条件付き退位の署名をする事を知らず、部隊をノルマンディーに移動させ、フォンテーヌブローのナポレオンを掩護しなかった事が、皇帝への裏切りと見なされた。しかしマルモンはこの汚名にもかかわらずローマ王の世襲までの攝政を置くよう連合軍に運動していた。王政復古になり、ルイ18世によりフランス貴族に任じられた。1830年の7月革命の時、パリ市民の反乱の鎮圧部隊の司令官

に任ぜられたが、余り乗気でなく傍観者の立場だった。7月革命から逃れるシャルル10世を警固してシェルブール港まで同行、その後国王と別れ自分も亡命の道を進んだ。ウィーンを訪れた時、シェーンブルン宮に住んでいた昔のローマ王その時はライヒシュタット公と親しく交際している。誤解から裏切り者とされたマルモンはナポレオンの将軍のなかでも、最も勇敢な将軍の一人といえよう。

23) Karl Philipp, prince de Schwarzenberg, duc de Krumau (1771-1820) : 1788年から89年にかけてトルコと戦い、94年からオランダでフランス軍と戦った。ホーヘンリンデンとウルムでの敗戦の時、見事な撤退作戦を行った。ロシア (1805-09)、パリ (1809-12) の駐在大使となり、この時、ナポレオンとマリア・ルイザの結婚式を祝賀するダンス・パーティーを主催したが、火災事故のため多くの死傷者を出す惨事となった (1810. 7. 1.-2.)。ロシア遠征の時は、フランス軍本隊の側面を掩護する支隊を指揮、ナポレオンにより元帥に任ぜられた。オーストリーが反ナポレオン陣営の連合軍に寝返った時、皇帝に和平を提案したが無駄だった。連合軍司令官としてドレスデン会戦で敗北したが (1813. 8. 26.-27.)、ライプチヒ会戦 (10.16.-19.) では勝利し、翌14年3月31日パリ入城を果たした。

24) passage des Panoramas : 第2区と第9区を走るモンマルトル大通り11番地にあった。1787年イギリス人ジョセフ・ベーカーが発明したパノラマが、1799年フランスに紹介され、フランス人の画家ピエール・ブレポーがこの権利を買って18のパノラマを製作、大通りの縁に沿い、ある邸宅の庭園に面して展示した。協力者のアメリカ人ジェームズ・タイヤーも2つのパノラマをつくり大通りから少しひっこんだ所に設置した。この2箇所のパノラマの間を歩いていた小路が、1808年に passage des Panoramas になった。

25) boulevard de Gand : 第2区と第9区にまたがるイタリアン大通りの北側部分を指した。それは百日天下の間ルイ18世が亡命していたベルギーの東フランドル地方の都市が「ガン」(オランダ語で「ゲント」) だったからである。この大通りの名前の由来は「イタリア座」théâtre des Italiens、現在は「オペラ・コミック座」théâtre de l'Opéra-Comique が近くにあったからである。

26) フォンテーヌブローの別荘：美しく広大な森の中にあるこの宮殿は、12世紀以来歴代の国王の愛した離宮だったが、最初は質素な狩猟小屋だった。それをフランソワ1世が1527年から大増築をし、その後も何度も増改築を重ねて現在に至っている。皇帝になったナポレオンは特にこの宮殿を愛好し多くの増改築を施している。

1814年4月20日午後1時、退位を決意し、エルバ島への出発のため、ナポレオンは宮殿正面玄関から「白馬の中庭」と呼ばれる宮殿正面の中庭に降り立ち、整列している兵士に向って告別の挨拶をする。忠誠を尽してくれた諸君と別れなければならないが、諸君はこれからも祖国のために尽力してほしい、最後に軍旗に接吻する事を許してもらいたい...ジャン・マルタン・ブティ將軍 (1772-1856) のさしだす軍旗に接吻すると、皇帝は「さよなら」と叫び手を振り、馬車に乗って去って行った。ナポレオン伝説の多くの名場面のうちでも、最も感動的な情景で、兵士たちは感涙にむせんで、去り行く馬車を見送ったのである。この宮殿では他にも歴史的事件があった。ルイ14世がナントの勅令廃止の署名をしたのも此処であり (1685)、ナポレオンが大陸封鎖令の強化策を決定したのも (1807, 1810)、政教協約の調印 (1813)、その当事者ピウス7世が軟禁された (1812-14) のもこの宮殿であった。

27) ile d'Elbe : イタリア半島とコルシカ島の間にあるティリア海に散在するトスカナ諸島中の最大の島。面積約500千平米、住民約3万人。古来から所有者が変転し、1802年のアミアン条約により、フランスの所有となった。1814年、連合国はこの島の主権をナポレオンに割譲し、彼は1814年5月3日に上陸する。しかし翌15年2月25日エルバ島を出発、最後の戦いに赴くのである。3月1日にフランス本土上陸、3月20日から6月28日までの百日天下、6月22日ワーテルローの敗戦、6月22日再度の退位、10月10日セント・ヘレナ島へ流される。この孤島で1821年5月5日に死去、遺灰は1840年にパリに帰国。

28) Gaspard, comte de Monge (1746-1818) : フランスの数学者。オラトリオ会の学校ついでメジエール工兵学校で学び、築城問題を新案の幾何学的方式で解決 (1765)、同校の教師ついで教授となった (1771)。1780年にはその業績により科学アカデミー会員になる。チュルゴにより創設された水力学講座を担当 (1780)、大革命の支持者でジロンド派だった彼は海相に就任 (1792. 8.-93. 4.)、火薬製造所や大砲製造所を建設、更に高等教育の充実のため、エコール・ノルマルとエコール・ポリテクニクの創設を提言した。ナポレオンのエジプト遠征に同行し、エジプト学の基礎を作った。王政復古により追放され、不遇のうちに歿した。彼の画法幾何学、解析幾何学は微分学、偏微分方程式論への道を開いた。

29) Pierre Simon, marquis de Laplace (1749-1827) : フランスの数学者、天文学者。ノルマンディーの貧農の息子。18歳で上京、ダランベールにその才能を認められ、彼の

推薦で僅か 19 歳で陸軍学校の数学教師となる。1783 年に科学アカデミー会員、翌年に砲兵学校試験官となる。大革命中はエコル・ノルマル、次にエコル・ポリテクニクの試験官。霧月 18 日以後、ナポレオンに見い出され 6 週間だったが内相 (1799.11.-12.)。元老院議員となり伯爵に叙せられる。ナポレオン失脚後はブルボン王家に仕え、フランス貴族、侯爵に昇進した。得意の解析学を駆使、天体力学の研究にニュートン以来の業績をあげた。その他、確率論、微分方程式論など理論物理学にも成果をあげた。

30) Bernard Germain Etienne de La Ville, comte de Lacépède (1756-1825) : フランスの自然科学者。音楽か博物学かと迷った末、ビュフオンの忠告をいれ学問の道へ。ビュフオンは彼を実験助手に採用し、植物園に勤務させた。また自著『博物史』の補充を命じた。植物園園長 (1785)、パリ大学教授となる。立憲議会ついで立法議会、五百人会議員を歴任、元老院議長 (1801)、國務相 (1804) になった。彼は常にナポレオンに忠誠を尽している。

31) Georges Léopold Chrétien Frédéric Dagobert, baron Cuvier (1769-1832) : フランスの博物学者。シュトゥットガルトの旧兵学校で経済学を学び、また比較解剖学に興味をもった。パリ博物館に招かれ後に同教授となった (1802)。この間コレージュ・ド・フランスの教授として、比較解剖学、動物分類学を講義、パリ附近から出土した化石を研究し古生物学に関心を示した。ナポレオンに重用されパリ大学総長として内外の教育行政を監督した。進化論に反対し突然変異説を唱えたが、実証主義的研究を旨とした生物学の確立に寄与した。『比較解剖学講義』*Leçon d'anatomie comparée* (1801-05) などの著書がある。

32) Jean Antoine Chaptal, comte de Chanteloup (1756-1832) : フランスの化学者、政治家。モンペリエ大学で医学を学び、同大学の化学教授となる (1781)。ルイ 16 世により貴族に列せらる。大革命時代はグルネル火薬工場長 (1793)、統領政府時代に内相 (1800-05)、産業博覧会を開催し (1801.02.)、産業の振興に努力した。百日天下の時代に國務相、商工業総監 (1815)、王政復古時代には貴族院に入った。化学者として硫酸、ソーダの製造、ワイン醸造法の改良を行い、また大陸封鎖令による砂糖不足を甜菜栽培で解決した。科学を工業に応用する事に貢献し、フランス資本主義確立期における技術の発展に寄与した。

33) Joseph Louis Gay-Lussac (1778-1850) : フランスの物理学者、化学者。エコル・ポリテクニクと土木工学校に学び、ベルトレ (1748-1822) の教えを受けた。1802 年、

気体の膨張の法則を発見，24歳で名声を得，1804年には気球によって高空の大気の成分を測定した。フンボルト（1769-1859）と共同研究を行い，1808年に気体反応の法則を発見，イタリア，ドイツで地磁気の調査を行った。テナール（1777-1857）と共にカリウム，沃素を研究，有機元素分析法の改良を行った。1808年に硼素（元素記号B）を，1815年にはシアン，青酸を発見した。パリ大学の物理学教授（1808-32），エコール・ポリテクニクの化学の教授を務め，1831年に代議士，1839年にルイ・フィリップにより貴族に選任された。

34) Jean Nicolas Corvisart des Marest（1755-1821）：フランスの医者。1794年パリ大学臨床医学初代教授となり，後にナポレオンの侍医に任命された（1807）。心臓病の権威で，心臓機能不全の際の応急措置などの研究で成果をあげた。

35) François Joseph Victor Broussais（1772-1838）：大革命時代と帝政時代には軍医，1814年ヴァル・ド・グラース病院の医局長。パリ大学病理学及び治療学の教授（1830）。彼はすべての病理現象は交感神経の刺激と炎症により説明し，消炎剤の治療（刺絡と吸玉）を推奨した。主著は『病理的生理学概論』*Traité de physiologie pathologique*（1825）など。

36) René Théophile Hyacinthe Laennec（1781-1826）：フランスの医者。1806年にネケル病院に勤務，コレージュ・ド・フランス教授（1822），パリ大学医学部教授（1823）。聴診器を発明し普及させ，心臓と肺の診察に貢献した。肺炎，肺結核肋膜炎などの物理的診断法を確立した。主著は『間接聴診概論』*Traité de l'auscultation médiate*（1819）。

37) Nicolas René Dufriche, baron Desgenette（1762-1837）：フランスの医者。エジプト遠征，ロシヤ戦役，ワーテルロー会戦に軍医として従軍。特にヤッファのペスト流行の防疫に努力し，兵士の精神衛生を維持した。1804年に保健衛生総監として，ナポレオンの全戦闘に参加した。王政復古によって失職，後にアンヴァリッドの主治医になった（1830）。科学アカデミー会員（1832）。

38) Jean Dominique, baron Larrey（1766-1842）：フランスの外科医。海軍次にライン軍団に勤務（1792），巡回移動野戦病院を構想する。ヴァル・ド・グラース軍医学校教官（1796），ついでエジプト遠征に参加，ナポレオンと終生の友になる。皇帝のすべての戦闘に同行，疲れを知らぬ献身振りで，到る所に野戦病院や病院を建設した。ワグラムの戦いの功績で男爵になる。ワーテルロー会戦で重傷を負い捕虜となった。王政復古になり，彼のナポレオンへの忠誠を知りながらルイ18世が彼を重用したのは，ひとえに優秀な医

者でありまたその廉直な人柄を見込んだからである。ナポレオンは彼を世紀最大の誠実な人間として敬愛し、彼に1万フランを遺贈している。近代軍事外科の創設者となった彼は、1829年に学士会会員に選任された。

39) André Théodore Géricault (1791-1824) : フランスの画家。カルル・ヴェルネとピエール・ゲランに学んだが、師のアカデミックな伝統技法に飽き足らず、ルーヴル美術館に通い、過去の巨匠たち特にルーベンスの影響を受けた。1812年のサロンに出品した「近衛獵騎兵士官」*Officier de chasseurs de la garde imperiale chargeant* で注目を浴びた。フィレンツェとローマに滞在、ミケランジェロ、ラファエロらの模写を行った。帰国後に発表した「メデュース号の筏」*Le Radeau de la Méduse* (1819) は、古典派とロマン派の論争の口火を切った大作である。イギリスで賛美された彼はロンドンに渡り、石版画を学び、その風景を描いた。落馬の事故で健康を害し、僅か33歳で、1824年1月18日パリで歿した。彼の大胆なデッサンと色調、情熱的表現は、ロマン主義絵画の先駆といわれる。

40) Jaffa はパレスチナの港湾都市で地中海に面する要所だったので、エジプトに遠征したナポレオンは1799年にこの都市を攻撃して占領するが、ペストが発生したため、早急に撤退しなければならなかった。この時皇帝は伝染を恐れず、ペスト病患者を見舞った事になっている。彼のお抱え画家となっていたグロはこの感動的場面を描いて(1804)、ナポレオン伝説の形成に貢献した。この大作はルーヴル美術館で展示されている。

41) Louis Leopold Boilly (1761-1845) : フランスの肖像画家。優雅な画像で人気を博したが、歴史画も何点か描いている。特に風俗画家として有名で、代表作は「馱馬車の到着」*L'Arrivée d'une diligence* (1803) である。因襲的でかなり無味乾燥な処理の手際を見せているが、しかし多くの風俗画はしばしば巧妙な構図を持ち、当時の社会を偲ばせる貴重な資料となっている。

42) Augustin Pajou (1730-1809) : フランスの彫刻家。ルモアージュ (1704-78) に学び、ローマ賞を得て(1784)、1752年から56年までローマに滞在した。帰国後は同門のジャン・ジャック・カフィエリ (1725-1792) の好敵手となった。デュ・バリ夫人の肖像を製作し、またヴェルサイユ宮の歌劇場の装飾を手掛け、その確かな技術と創意に富む幻想力を示した。ルイ16世の依頼でデカルト、バスカル、ボシュエら偉人の立像も製作した。「捨てられたプシュケ」*Psyché abandonnée* (1785-1791) は柔媚なモデルの優美な姿態で彼の代表作となっている。

43) Jean Antoine Houdon (1741-1828) : ルメールとピガルに学びローマ大賞を得てイタリアに留学 (1764-68), キリシヤ・ローマ及びルネサンス期作品の影響を受けた。1767年の「皮を剥いた人体」*Ecorché*は人体の筋肉構造についての注目すべき研究だった。帰国後は「ダイアナ」*Diane* (1780), 「冬」*L'Hiver* (1783), 「夏」*L'Été* (1785)などを製作し、センスの良さと優美な手法を印象づけた。美術学校教授となり (1778), 学生を指導しながら創作に励み、モリエール、ディドロ、ルソーなどの肖像を製作したが、代表作はフランス座に安置されているヴォルテール像 (1778) といわれる。またフランクリンに同行しフィラデルフィヤに行き、ワシントン像 (1785), フランクリン像 (1778) を製作した。写実的リアリズムと端正な古典主義を融合した彼は、18世紀最大の彫刻家の一人に数えられる。

44) François Rude (1784-1855) : ディジョン生れの彫刻家。初めドヴォージュに学び、1870年パリに上京してカルトリエの助手になる。熱烈なナポレオン支持者だったため、皇帝没落の時 (1814), ベルギーのブリュッセルに亡命 (1815-27), ダヴィッドの援助でモネー劇場の正面玄関の装飾の仕事を得た。帰国 (1827) してから、力強い作品を発表して人気を得、ティエールの依頼でエトワール広場の凱旋門のアーチのせり台の一つの装飾のための群像を製作した。「義勇兵の出陣」*Départ des volontaires* 通称「ラ・マルセイエーズ」*La Marseillaise* (1835-36) はアカデミックな伝統に忠実な作品だったが、中央の人物の過剰な暴力性、写実的な構図の特徴的な動きが、古典趣味の保守派から烈しく批判された。「ガスパール・モンジュ」*Gaspard Monge* (1848), 「ネー将軍」*Le Maréchal Ney* (1852-53) などの傑作もある。

45) Etienne Nicolas Méhul (1763-1817) : フランスの歌劇作家。オルガニストとして宗教音楽を作曲していたが、グルックに励まされ、彼の歌劇改革の精神を体して、歌劇創作に専念した。大革命から帝政時代にかけて約30篇の作品を執筆したが、「ジョゼフ」*Joseph* (1807) が傑作といわれる。バレエ、交響曲、革命賛歌なども作曲したが、特に「出陣の歌」*La Chant du départ* (1794) が有名である。

46) Maria Luigi Corlo Salvatore Cherubini (1760-1842) : イタリアの作曲家。フィレンツェ生れ。ポーロニャでジュゼッペ・サルティ (1729-1802) に学び、最初教会音楽を作曲、後に歌劇に転向、ロンドンからパリに来て定住し (1788), 「ロドイスカ」*Lodoïska* (1791) など多くの作品を発表した。パリ音楽院長 (1821-24) となり、ハイドゥンやベートーヴェンから敬愛され、全欧州の名声を博した。宗教音楽にも再び手を染め、

シャルル 10 世の戴冠式のため「長調ミサ曲」*La Messe en majeur* を作曲している。メンドルスゾーンも彼の影響を受けている。

47) François Adrienne Boiëldieu (1775-1834) : フランスの作曲家。故郷ルアンでオルガニストとして活動、最初の歌劇 2 篇 (1793, 95.) は好評だった。パリに上京、オペラ・コミックを発表、特に「バグダッドのカリフ」*La Calife de Bagdad* (1800) は大好評だった。家庭の不幸からパリを去り (1803), ロシヤに行きアレクサンドル皇帝から礼拝堂監督に任じられ、ペテルブルグの王立歌劇団も指揮した (1803-10)。1812 年に帰国、パリ音楽院の作曲科教授となり、ロマン主義の先駆的作品「白姫」*Dame blanche* (1825) を世に送った。

48) François Joseph Gosse, dit Gossec (1734-1829) : ベルギー生れの作曲家。アントワープのノートル・ダム教会の聖歌隊員。1751 年パリに上京、ラモーの後援で徴税請負人ラ・ポリニエールの私有楽団の団長になり、またジャンティイでコンティ公やコンデ公妃のための演奏会を指揮した。作曲したオペラ「村のお祭り」*La Fête de village* (1778) などで大成功を博し、1775 年にオペラ座の支配人になった (1782)。大革命に心酔し、多くの革命賛歌や軍歌を作曲した。宗教音楽、オペラ、器楽曲、室内楽など多くの作品を残した。

49) Louis Joseph Ferdinand Herold (1791-1833) : フランスの作曲家、オペラ・コミック作者。パリ音楽院でメユルに学び、バッハに傾倒する。2 篇のオペラ「ザンパ」*Zampa* (1831), 「プレ・オ・クレルク」*Pré-aux-Clerc* (1832) で成功した。その他歌劇約 20 篇、バレエ音楽、室内楽などの作品がある。

50) Daniel François Esprit Aubert (1782-1871) : フランスの歌劇作者。ケルビーニの弟子で初め喜歌劇「神と踊り子」*Le Dieu et la bayadère* などを書いたが、やがて「ポルティシの唾娘」*La Muette de Portici* (1828) や「フラ・ディアヴォロ」*Fra Diavolo* (1830) のようなドラマチックな本格的歌劇を創作した。

51) セーヴル焼き : セーヴルはパリ南西ナンテール郡オート・セーヌにある町で、現在の人口は約 2 万人。ヴァンセンヌにあった陶磁器製造所 (1740 年創設) が、この地に移転したのは、ルイ 15 世の愛人ポンパドゥール夫人の発案であった (1756)。中国や日本など東洋で製作される磁器を西洋でも製造しようと、当時のヨーロッパ各国は研究していたが、18 世紀はじめドイツのザクセン地方で基本素材カリオンが発見されてから製造に成功、この秘法はマイセンで厳重に管理され内外不出だった。フランスではリムーザン附

近のサン・ティリエでカリオンが発見され、磁器製造が可能になった。美術工芸を愛し保護奨励していたポンパドゥール夫人が積極的に援助して工房を新設し、フランスでも本格的生産体制を確立した。工房は1759年に王立工場に認可され、製品にはすべて金を使用する特権を与えられた。

52) Pierre François Fontaine (1762-1853)：フランスの建築家。イタリア留学から帰国(1785)後は、終生ベルシエと協力した。帝室一等建築官となり(1813)、半世紀にわたり、ルーヴル宮、チュイルリ宮担当を務めた。帝政時代を通じ多くの大工事、すべての国際的式典の装飾工事を行った。マルメゾンの改造、カルーゼル凱旋門(1806-07)、リヴォリ街完成工事、ルイ16世の贖罪礼拝堂、パレ・ロワイヤルのオルレアン柱廊などが代表作。

53) Charles Percier (1764-1838)：新古典派のフランスの建築家。ローマ大賞を得て(1786)、ローマに滞在、エジプト、ギリシャ、ポンペイの古代建築からもルネサンス様式からも影響を受けた。フォンテーヌの終生の協力者として、総裁時代には多くの大邸宅の装飾工事に当たった。二人はナポレオンから依頼され、官邸や宮殿の増改築を実施、いわゆる帝政様式を確立した。カルーゼルの凱旋門やリヴォリ街に面するルーヴル宮の翼棟などをフォンテーヌと協同で建設した。しかし彼は王政復古後は引退し、全く仕事はしていない。

54) Georges Jacob (1739-1814)：フランスの家具製造業者。ルイ15世時代から始まったロカイユ様式の継承者で、ルイ16世時代、総裁政府時代を通じて最も優秀な家具職人だった。簡素な直線の金銀細工を使った重厚なマホガニー製の家具は、ブロンズや多色な嵌込みで装飾されていた。1796年に彼は息子のGeorges (1768-1803)とFrançois Honoré (1770-1841)に家督を譲った。息子たちはJacob-Desmalter工房を創立(1803)、ベルシエとフォンテーヌのデザインする家具を製作し、帝政時代の代表的家具製造業者になった。王政復古になってからはルイ18世の依頼で、ベリー公のためにエリゼ宮の家具類を製造している。

55) Lucius Septimius Severus (146-211)：ローマ皇帝(193-211)。アフリカのレプティス・マグナに生れ、軍人としてイリリア軍団を指揮していた時、部下に推戴され皇帝となり、ライヴァルを倒しローマに入城した(190)。親衛隊を編成して独裁政権を確立、騎士階級と新官僚を母胎に元老院の権力を縮小した。帝国の安全と拡大を狙い、東方のパルティア人征討(194-99)、イングランド遠征を行ったが、現在のヨーク、当時のエブラ

カムで歿し、帝国を2人の息子カラカラとゲタに残した。

56) Alexandre Théodord Brongniart (1739-1813) : 新古典主義派の建築家。ブイエとガブリエルに学び、1765年から現場に出た。優雅で抑制された新古典主義様式で、コンテ館(1780)など多くの邸宅を建築した。代表作はパリの株式取引所(1807年起工、1895年拡張)で壮大な帝政ローマ様式を採用した。造園技術にも秀で、ペール・ラシェーズ墓地を設計、そのイギリス式庭園が絶賛された。サン・ルイ・ダンタン教会も建立している。

57) Bernard Poyet (1742-1824) : 国費留学生としてローマへ赴く。帰国後、オルレアン公お抱え、ならびにパリ市と大司教お抱えの建築家となる。オルレアン厩舎、ブルボン宮の建造に才腕を発揮、また当時の権力者にとり入って寵愛され、帝政時代と王政復古時代を通じ間断なく仕事を続行した。セヌ川に最初に鉄橋を架ける着想を発表したのは彼である。

58) Jean François Chalgrin (1739-1811) : 1758年ローマ大賞を得てイタリアに留学し古代建築を研究、帰国後は国王及び王弟プロヴァンス伯お抱えとなった。簡素で優雅なギリシャ建築様式を得意とし、新古典様式として最初の作品「サン・フィリップ・デュールール聖堂」(1774-1784)を建立した。また、コレージュ・ド・フランスやリュクサンブール宮、サン・シュルピス教会の北塔の増改築を手掛けた。総裁政府時代、帝政時代を通じ誇り高い大建築の現場を指揮した。ナポレオンにより、エトワール広場の凱旋門の建設を命じられ設計したが、完成を見ずに死去した。

(続　く)

(追　記)

- (1) 参考図書などは、[I]の巻末に掲載してありますので、そちらを御参照下さい。
- (2) 前稿〔XIX〕に校正ミスがありました。下線の如く御訂正下さい。

P.1. 下から5行目　ベルナルダン